

新 選
古語辭典

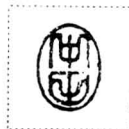
新 版

新 選 古 語 辞 典

新 版

中 田 祝 夫 編

〈新選古語辞典〉
新 版



昭和十六年四月十日
昭和四十年二月十日
昭和五十年四月一日

初版発行
改訂新版発行
新版第四刷発行

編 者 中 田 祝 夫

発行者 相 賀 徹 夫
東京都千代田区、ツ橋、ノ、ノ、

印刷所 共同印刷株式会社
東京都文京区小石川四ノ十四ノ上

発行所

東京都千代田区、ツ橋、ノ、ノ、
株式会社

小 学 館

電話東京03大代表
振替東京

【郵便番号】

造本には、じゅうぶん注意しておりますが、万、落丁、
乱丁などの不良品がありましたら、お取り替えいたします。

(鈴木製本)

編者のことば

わたしが教壇で古典を読み、古典と古典文法を説くようになってから、もう三十何年かになった。この間に新しい時代の人々と日本の古典とを結びつけていくためには、どういう編集の古語辞典が望ましいかということがはつきりしてきた。また長年の積み重ねによって、この語句はこう解くのが正しい、こう解けば若い人々にはよくわかるといった諸点も、かなり増してきた。近年に至って古典のさまざまな部分が、若い人々に理解しがたく、親しみがたいものになってきているが、この古語辞典は、その隔たりに、わたしの経験により、橋渡しをかけようとしたものであり、これによって古典と若い人々を結びつける一助にしたいと思う。

日本の古典はわれわれの祖先の文化遺産であるが、ある見方からすれば、それはまた現在の社会の間に流れ通うわれわれ相互の精神的血液ともいふべきものである。だから、古典は民族の形成にかかわることは無論のこと、民族文化の創造と発展に根深く関係する。

日本語の中のごくありふれたことば、たとえば「春」「秋」「かなし」「あはれ」「たのし」といったことばをとりあげてみるに、それは単なるコミュニケーションの道具ではなく、それぞれの周辺には必ず奥深い情緒なり美しい光彩なりがある。つまり語感といってもよいが、一つ一つのことばのこの光背のごときものを味わい得ないならば、日本語を真に知るものということはできないであろう。しかして、この美しい深みのある語感のよってきたところは古典なのである。つまり、そのことばが使用されている古典文学のさまざまな場面の連想があつて、一つ一つのことばに床しい光彩がつきまとうのである。だから、万葉があり源氏があり、芭蕉があり西鶴がありして日本語はより美しく深みのあることばになるといってもよい。古典なくしては、日本語の美しさも日本

的感性の奥深さも十分に味わえないのではなからうか。

日本の自然——日本の梅や桜や紅葉はそれ自体としてそれぞれに美しく、日本の四季はいずれも好ましいが、古典の記述の背景が胸中にあるとき、それらはますますその趣を深くする。日本の山河は美しいが、歴史と古典との背景があつて、一層その感興が深くなる。だから歴史や古典に対する教養が、日本人の資質を形成するといつても過言ではない。

この故にわれわれは、古典の全国民的な普及と古典教育の徹底・深化とに熱意を感じざるを得ないものであるが、古典と古語を現代に生かす古語辞典の任務には、確かにはなはだ重いものがある。この古語辞典はその重大な責務にはげまされて成った。そして、この古語辞典は編集目標をひたすら以上のような点において編集したから、本書は結果として他の類書とは異なる特色を具備することができたと思う。

本辞典の数ある特色は、長く使用するうちにはつきりしてくると思うが、「参考」の欄なども特色の一つである。ここでは語構成や語源などを指摘し、また語義の変遷などにも注意した。また古典や古典語を理解すること、つを指摘したような部分もあり、こうした方面からの理解の集積がやがて古典文学に興味をいだく道に連ならう。また、用例文の出典の示し方を詳細かつ正確なものにし、辞典と古典作品をより密接に結びつけることのできるように配慮した点もこの辞典の特色としてあげられよう。この故に、この辞典の使用者は、従来よりも容易に古典の原出典に近づき得る契機を持ち、やがておのずから古典そのものに親しみ、その世界に導入せられる喜びを感じるようになると思ふ。

ともあれ辞典の本来の生命は内容の豊富さと記述の正確さにある。よつて本辞典はこの点に生命をかけたものであり、特にこれを大きな特色として自負する。しかしこの重大な特色は多年この辞典を使用した人々によつ

ておのずから確認されることであらう。

この辞典編集には多くの人々の献身的な協力をいただいた。まず当初の企画には佐伯梅友博士、青木孝氏のご援助を得た。原稿執筆には左記の諸先生、諸氏のご協力を得た。中で、原田芳起教授・関根慶子博士・高橋貞一博士は、上代・中古・中世の重要語について、武田誠一氏は助詞・助動詞について熱心に協力を与えられた。また、有職故実の研究家中村義雄氏には関係項目のほかに、本文・付録のすべての挿し絵の執筆を懇請した。その他、この辞典のすぐれた特色や正確な記述は、多数の方々への援助の賜である。記して、深甚の謝意を表するものである。

昭和四十七年十一月三十日

中 田 祝 夫

編集協力者……青木茂・池田広司・石井恒子・磯貝山右衛門・伊知地操男・伊牟田経久・鰐沢瑛子・太田克己・大谷芳房・加藤彰彦・菊地卓夫・菊地良一・岸田幸四郎・北恭昭・国田百合子・小池正胤・小林一仁・小林のぶ子・小山喜平・佐佐木鐘三郎・篠田融・志村士郎・関良一・武井弘雄・竹内誠・武田孝・立平幾三郎・田中伸・根上剛士・野村雅昭・畠山豊・畠山義和・林義雄・日野得隆・平林文雄・広田二郎・福田広彦・藤本二郎・細谷直樹・堀内武雄・舞田正達・前田薫・梶繁・松井一夫・丸山一彦・水上甲子三・村上治・両角倉一・柳原博・山下一海・山中襄太・米田千鶴子

(五十音順・敬称略)

△新版刊行にあたって▽

本辞典は刊行以来十余年、全国二百万以上の方々へ愛用された。そして極めて多数の方々から折りにつけて改訂の問題点につきご教示を受けた。また、本辞典の全ページを精読し、他の辞典との比較を徹底的に試みられるという方さえ幾人が現れた。光栄の至りである。この新版はその意味で、全国の愛用者と編者との合作である。深く感謝申し上げ、さらにご高評を期待する。(編者識)

昭和四十八年五月三十日

新版補訂執筆者……渥美功・荒木功光・漆原直道・榎並章・小池清治・小久保崇明・小林洋次郎・田所寛行・田中洋二・田辺秀夫・田村二葉・

森朝男

(五十音順・敬称略)

この辞典を使う人のために

一 編集の方針について

- 1 この辞典は、日本の古典を学習する高校・大学生、国語・国文学研究者、さらには、古典を愛し、また日本語の歴史に関心をいだくすべての人々に、たえず手もとにおいて利用していただくように編集したものである。
- 2 この辞典には、日本の古典の読解に必要と思われる約四万余のことばが収めてある。その範囲は、上代から明治時代にいたる一般語彙^①、助詞、助動詞、接頭語、接尾語、成句、ことわざなどのほか、文学史用語・文化史用語、主要古典に現れる人名・地名・社寺名・書名・曲名に及んでいる。また、これまで、この種の辞典でとりあげられることの、比較的少なかつた漢語についても、特に意を用いた。
- 3 収めたことばの、ひとつひとつについて、漢字表記・現代仮名づかい表記・品詞および活用・解説・用例を示し、特に必要と思われる項目には、挿し絵を添えた。また、発音の歴史的な移り変わり、語源・語史については、最新の研究成果を取り入れて、**参考**欄などで特に充実した解説をほどこした。
- 4 付録には「文法事項表覧」「国語・国文法用語便覧」「国語の変遷」「紛らわしい品詞の識別」「敬語分類一覧」「漢文訓読語要覧」「官位一覧表」「主要出典一覧」「江戸時代の貨幣」「日本文学史年表」などを添え、旧国名・服飾・仏具・建築・時刻・方位などに関する図版を収めた。「字音の新旧仮名づかい対比表」「歴史的仮名づかいの知識」を見返しに出し、使用者の検索の便をはかった。

二 見出し語について

- 1 見出し語は歴史的仮名づかいにより、国語・漢語は平仮名、外来語は片仮名で示した。ただし、外来語のうち、その意識の薄くなっているものは、平仮名で示した。
 - 2 語構成のわかることばについては、各要素を「」で区切って示した。ただし、固有名詞では「」を省略した。
 (例) さん・ほう【三宝】 しき・ゐ【敷居】
 しが【志賀】 ながと【長門】
 - 3 活用語は原則として終止形をあげ、語幹と語尾との間は、「」で区切った。
 (例) う・し【憂し】 やさ・し【優し】
 かき・あく【掻きあく】 せ・む【責む】
- ただし、
- (イ) 語の区切りと活用語尾の区切りとが一致する場合は、その区切りは「」だけで示した。
 - (例) こぎ・みる【漕ぎ廻る】 こう・ず【講ず】
- (ロ) 形容動詞および漢字二字以上から成るサ行変格活用の漢語動詞は、語幹だけを示した。

三 配列について

- 1 見出し語は五十音順にしたがって配列した。
- 2 濁音・半濁音は清音の後に、拗音・促音は直音の後に、配列した。
- 3 見出し語が同じ仮名の場合、次の原則によった。

(イ) 品詞などの順。

名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・連体詞・枕詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞・接頭語・接尾語・連語の順。

(ロ) 見出し語の漢字表記の画数によって、その少ないものから多いものへの順。

4 三音以上の語を基本とする複合語は、原則として、その基本となる見出し語(親見出し)の下にまとめ、五十音順に配列した。この場合、その複合語の親見出しとの重複部分は「―」で示した。

(例) せつきやう【説経】^{せつきやう}【名】……がたり【説経語】^{がたり}【名】……さいもん【説経祭文】^{さいもん}【名】……し【説経師】^し【名】

5 固有名詞は、原則として独立項目とした。

6 成句・ことわざなどの連語は、次のように処置した。

(イ) その最初の語で引けるように、その親見出しの中に追いこんで、五十音順に配列した。その連語の、親見出しとの重複部分は「―」で示した。ただし、活用する語の場合は「―」を用いなかった。

(ロ) 直接漢字表記を示し、必要のあるものは、その読み仮名を歴史的仮名づかいによって示した。また語の区切りを示す「・」は用いず、活用のあるものは「・」によって活用語尾を示した。

(例) いのち【命】^{いのち}【名】……有つての物種……生く……限り……死ぬ

いは【岩・磐・巖】^{いは}【名】……切・る……の懸け道

(ハ) 追いこむべき親見出しをもたないもの、また、単独に示したほうが検索しやすいと思われるものは、その全部を平仮名見出しによって示し、独立の項目とした。

(例) こなかをうなす【子仲をなす】^{こなかをうなす}【連語】
いはむかたなし【言はむ方なし】^{いはむかたなし}【連語】

四 漢字表記について

1 見出し語に対して、古典で一般に当て用いられている漢字を、

【一】に囲んで示した。

2 当用漢字表・人名漢字表にある字体は、新字体を用いた。

3 送り仮名は、原則として、昭和四十八年六月十八日内閣告示「送り仮名の付け方」に準じ、歴史的仮名づかいで示した。

4 二種以上の漢字表記のある場合は、語源に近いと思われるものから先に並べた。

五 現代仮名づかい表記について

1 見出し語の歴史的仮名づかいに対する現代仮名づかいを、漢字表記の下に、片仮名二行組みによって示した。

(例) はうりやう【方領】^{はうりやう} わらは【童】^{わらは}

2 この場合、区切りは、語と語、当てられた漢字ごととし、仮名づかいの一致する部分は省略して「・」の記号で示した。

(例) おし・あは・す【押し合はす】^{おしあはす} たい・さう【胎蔵】^{たいさう}

3 親見出しに追いこまれた複合語で、親見出しと重複する部分は、いちいち「・」を示さなかった。

(例) てん・じやう【殿上】^{てんじやう}【名】……わらは【殿上童】^{わらは}【名】
せつきやう【説経】^{せつきやう}【名】……じやうる【説経浄瑠璃】^{じやうる}【名】

4 親見出しに追いこまれた連語は、その現代仮名づかい表記を省略した。ただし、親見出しがなく、独立見出しとなっている連語は右の1・2に準じて示した。

(例) さうらはん・すらん【候はんすらん】^{さうらはんすらん}【連語】
いふかたなし【言ふ方なし】^{いふかたなし}【連語】

5 現代仮名づかいと実際の発音が異なる場合には、その発音を【一】に囲んで示した。

(例) し・くは・ふ【為加ふ】^{しくはふ}

六 品詞および活用について

1 品詞の区別は【一】で囲み、8ページの略語表の通りの略語によって示した。

2 動詞は、特に「他ラ四」「自マ下二」の形で、自動詞・他動詞の区別および活用の種類を示した。

3 動詞・助動詞の場合、品詞の次に、その活用表を「」で囲んで示した。

(例) くば・る(配る)「他ラ四」
き(助動特活)

ただし、二字以上の漢字から成るサ行変格活用の動詞についてはこれを省略した。

4 形容詞・形容動詞は活用の種類を示した。ただし、活用形は、いちいち示さなかった。

5 助詞は、次の七つに分類した。

格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・終助詞・間投助詞・準体助詞

6 枕詞は、「枕」の略語を用いて示し、品詞に準じて扱った。

七 語義解説について

1 語義解説は、わかりやすく、ていねいに、をモットーとし、まったく予備知識のない人でも、すぐにその語の語義が理解できるように、くふうした。

2 表記は、原則として、当用漢字・現代かなづかい・新送りがないようにした。

3 読みにくい漢字、特殊な読みかたをする漢字については、その読み方を漢字の下に()に囲んで、現代仮名づかいで示した。

4 解説文中に古語を用いた場合、次のように処置した。

(イ) 古語であっても、だれにもすぐ理解できることばである場合は、解説文中の普通のことばと同様に扱った。

(ロ) この辞典にあるその項目を参照したほうがわかりやすいようなことばである場合には、「」で囲んで示した。この場合、仮名書きのものは歴史的仮名づかいで示し、また、漢字書きのもので、読み方のわかりにくいものは、()の中に歴史的仮名づかいによる読み仮名を示した。

(例) 「かさね」の色目の名。

「蔵人所」に属して殿上の雑事に使われる職。

5 解説文中で、わかりにくいことばを用いた場合、漢字まじり平仮名文で、()に囲んで注記した。

(例) セギナク(草の名)の異名。
繰り綿(種を除いただけの綿を打つ道具)。

6 見出し語の簡単な語源的・語史的説明、また時代による発音の移り変わりの説明などは、解説文の初めに、「」に囲んで示した。

(例) さわぎ(騒ぎ・噪ぎ)「名」(奈良時代は「さわき」)
せん・みやう(宣命)「名」(命を宣ふる)すなわち、勅命をのべ伝える意)

やい・ば(刀・焼刀)「名」(「やきば(焼刀)の音便」)

ただし、詳細にわたる語源・語史、また類義語との意味の違いなどは、**参考**欄で解説した。

7 俳諧で季語として用いられる語のうち、その季語のわかりにくいものについては、(季・春)(季・夏)……として、解説文の最後を示した。

8 一つの語に語義が二つ以上ある場合は、原則として語源に近いものから①②……の形で区分した。また①②……の中をさらに細かく分ける必要がある場合は、①②……、③④……の順に区分した。

9 語源が同じであって、当てられる漢字が違う場合、また品詞の種類が違う場合には、……の形で区分した。

10 右の場合、見出し語が動詞であって、活用形は同一で……に違いがある時(たとえば自動詞と他動詞、動詞と補助動詞)特に活用形を……の上に置いて、その活用形が……のどれにも共通であることを示した。

(例) おく(置く)「自カ四」……「他カ四」
おち・る(落ち)「自ラ四」……「補動ラ四」……

11 解説文中で、外来語・能業用語・動植物名などは、原則として、片仮名で表記した。

12 次のようなものには、語義の解説を省略したことがある。

(イ) あることばのいくつかの語義のうちで、現代語とまったく同じ意味で用いられている語義。

(ロ) 連語・複合語をその下にまとめるために便宜的にたてた見出し語の語義。

13 語義解説に付属する記号として、次のようなものを用いた。

↓ 参照・参考項目。

↑ 反意語・対照語。

八 用例について

1 用例は、ほぼ次のような基準によって選択した。

(イ) なるべく古い時代のもの。

(ロ) 前後の文脈がわかりやすく、その語の意味を正しくとらえることのできるもの。

(ハ) 人々から広く親しまれている古典にあるもの。

2 用例文は「」で囲み、出典はへで囲んで示した。

3 用例文の表記については、読みにくい漢字は平仮名に改め、適当に句読点をうつなどの処置をとった。また仮名の部分は歴史的仮名づかいに統一した。

4 用例文中の助動詞の「む」などは、原則として、平安時代以前の用例では「む」、鎌倉時代以後の用例では「ん」を用いた。

5 用例文中、見出し語にあたる部分は「」で示し、用言はその語幹だけを「」で示して、語尾は「」で区切ってその下に示した。ただし、

(イ) 形容動詞および二字以上の漢字から成るサ行変格活用動詞は「」で区切ることをしなかった。

(ロ) 「す」「う」「みる」などのように、語幹と語尾とが分けられないものは、そのまま示した。

(ハ) 見出し語と形の異なる用例は全部示した。

(ニ) 「古事記」「日本書紀」および古辞書の類で、もとの表記を示したほうが、理解の助けになると思われる場合は、原典をその

まま引いた。

6 用例文の理解を深めるために次のような処置をとった。

(イ) 会話・思考内容の部分は、原則として『』に囲んで示した。ただし、引用文全部が一人のことば・思考である場合は「」のままにした。

(例) 「さらば、こなたから連歌をなされい、いや、まづなされまいか」

(ロ) わかりにくい漢字の読み仮名を、() に囲んで、歴史的仮名づかいで示した。

(例) 「壺装束（うすまとい）をばかりして、なまめき化粧（なまめきけしやう）してこそありしか」
むずかしい語については(……)として、漢字まじり片仮名文で注記をしるした。

(例) 「はやく（はやく）モトモト（もともとも）跡なき事（あとなきこと）事実無根（じじつむこん）ノコトにはあらざめり」

(ニ) 途中に語を補ったほうがわかりやすくなると思われる部分については、() の中に、漢字まじり片仮名文で補説をしるした。

(例) 「をなき者どもが余りに私（ひ）したひ候を、とかうしらへおかと仕る（はまに、存の外の遅参ヲ致シマシタ）」

7 出典は次の方針にしたがって示した。() 詳しいことは、付録「主要出典一覧」を参照されたい。

(イ) 「古事記」は「記」、「日本書紀」は「神代紀」「神武紀」のように、「○○紀」とした。

(ロ) 「古事記」「日本書紀」のうち、いわゆる記紀歌謡については、「記謡」「五」「記謡」「三」のように、歌謡番号で示した。

(ハ) 原則として、物語類は「物語」を、日記類は「日記」を、歌集は「和歌集」の部分省略した。ただし、私家集は書名をそのまま示した。

(ニ) 歌集のうち勅撰集をはじめ、主要なものには部立てをしるし、「万葉集」には「国歌大観」の番号を示した。

(ホ) 芸能に関するものは、その種類と作品名とを示した。ただし、浄瑠璃のうしろ、近松門左衛門の作品については、(近松油地獄)と、作者の名を示した。

(ハ) 川柳は、「柳樽」「柳樽拾遺」所載のもののみ出典名を示し、それ以外は「川柳」として示した。

(ト) 読みにくい出典名には、平仮名現代仮名づかいでその読み方を示した。

〔例〕〈源・落標おちふち〉〈黄・艶気えんき権けん焼やう〉〈近松・寿門松しうもんしょう〉

〔伎・三十石さんじゅうしき船始ふねはじり〉

(チ) 主要な出典については、原典検索の便をはかり、巻名・巻数・段数、さらにその引用部分のボビュラーな呼称を含めて、小見出しを、できるだけくわしく示した。

〔例〕〈記上・伊邪那岐命と伊邪那美命〉〈崇神紀・五年〉〈万・三〇三〉

〔竹取・帝の求婚〉〈古今・春上〉〈土左・十二月二十七日〉

〔蜻蛉・天延二年〉〈源・桐壺〉〈枕・すさまじきもの〉〈今昔・丑の

二〉〈平家・祇王〉〈徒然・六五〉〈奥の細道・松島〉〈一代

男・三〉〈浮世風呂・前上〉〈膝栗毛・品川〉〈一茶・父の終焉

日記〉

九 参考欄について

1 古語の語源・語構成・語史、また類義語との意味・用法の違いなど、古典読解の助けとなる知識をまとめた。

2 参考欄は語義解説とあわせて読み、古典語のニュアンスなどを理解するようにされたい。その意味で、参考欄を通読すること望ましい。

3 参考欄の位置は、

(イ) 親見出しの参考は、その解説・用例のあとに置いた。

(ロ) 親見出しに追いこまれた連語は、その解説・用例のあとに置いた。ただし、その連語が二語以上ある場合は、原則として、すべての連語の解説のあとに置いた。

略語

表

〈品詞〉

〔名〕	名詞
〔代名〕	代名詞
〔目〕	自動詞
〔他〕	他動詞
〔補助〕	補助動詞
〔形〕	形容詞
〔形口〕	口語形容詞
〔形動〕	形容動詞
〔形動口〕	口語形容動詞
〔連体〕	連体詞
〔副〕	副詞
〔接統〕	接統詞
〔感〕	感動詞
〔格助〕	格助詞
〔接助〕	接統助詞
〔保助〕	保助詞
〔副助〕	副助詞
〔終助〕	終助詞
〔間投助〕	間投助詞
〔準体助〕	準体助詞
〔助動〕	助動詞
〔接頭〕	接頭語
〔接尾〕	接尾語
〔枕〕	枕詞
〔連語〕	連語

〈活用〉

〔四〕	四段活用
〔上一〕	上一段活用
〔上二〕	上二段活用
〔下二〕	下一段活用
〔下三〕	下二段活用
〔カ変〕	カ行変格活用
〔サ変〕	サ行変格活用
〔ナ変〕	ナ行変格活用
〔ラ変〕	ラ行変格活用
〔ク〕	ク活用
〔シク〕	シク活用
〔ナリ〕	ナリ活用
〔タリ〕	タリ活用
〔特活〕	助動詞特殊活用

〈その他〉

↑	参照・参考項目
↓	反意語・対照語
〔季・春〕	春の季語
〔季・夏〕	夏の季語
〔季・秋〕	秋の季語
〔季・冬〕	冬の季語

あ

「あし」は「安」の草体
「ア」は「阿」の偏

あ「足」名。あし。「誰」が乗れる馬の——の音。を片に聞かする。方。云馬。

あ「案」名。「案」の字音の略。中古では字音のはねる音を仮名で表記しないが普通「あん案」に同じ。げに——のごとく「案」トオリ。御心にみけり。入源。螢。

あ「群」名。たんなりの境。あせ。菅田。の阿。をはちら。入記。上天照大神と須佐之男命。

あ「彼」代名。遠称の指示代名詞。あれ。「カケヤ姫」の書きおきし文を入竹取。ふじの山。——はと見る。淡路の島のあはれさ。入源。明石。

あ「我」吾。代名。人称代名詞。自称。わたし。われ。「吾妹子」し——を思ふ。入方。三。四。自。

あ「感」①喜び。悲しみ。驚きなどの感動を表す声。「——射たり。入平家。二。弓流」。②呼びかけの声。「主人——といはば。郎等さ」と出づべき体。なりけり。入盛衰記。六。入道院参。③答える声。「あちへ失じよ」。入狂。末広がり。あ「感」①喜び。悲しみ。驚きなどの声。「——あふない。入狂。二。大名。②驚いて呼びかける声。「——これこれ。まつお待ちやれ。入狂。粟田口。③応答の声。「——やいやい。太郎冠者。——もういやでござる。入狂。素襦落」。

あ「申し」驚いて呼びかけること。「——、何とめさ。たぞ」。入八句連歌。

あ「あしや。こしや」連語。あざわらうことば。ああいゝ興味だ。こ。こは嘲咲。ひ。ぞ。入記誦。ひ。ええしや。こや。

あ「あ」感。あを強めた形。強い感動を表す声。「——悲しや。これは参り候ふ。さのみおん責め候ひそ。入狂。くじ罪人。——おしろからずの雪の供。入柳樽」。

あ「愛」名。愛情。古くは小さいものをかわいがり、幼いものをたのしめる意。男女の愛情に用いられるとは少ない。——に愛もつ。あいきがこはれるようなさま。「あいいいと。——女同士。入争。手習鑑」。

あ「感」呼ばれた時の返事の声。はい。「——、——、と

言ふなび締める抱え帯。入柳樽。初。名。うけこたえ。合図。「招けはうな。く。笑へば」を。入二。代男。あ「あい。し」愛愛し。「形シ」愛らし。「青黛」青イマユミの肩のわたり。丹華。の口つき。——しく。入盛衰記。八。文覚心。

あ「いきやう」愛敬。敬愛すること。「アイキヤウ」日葡辞書。——つきあひ。愛敬つきあひ。名。とおひ。つべん。の交際。儀礼。の交際。減。入物。八。貸。去。さ。を。こ。は。入近松。博多。——つく。愛敬つく。入力。四。人。つきあひ。い。く。なる。——きて。憎。か。入。人情。娘節用。——らしい。愛敬らしい。形口。あいきやう。い。かわいらしい。鍵屋。の小。ち。う。め。ら。小娘。も。い。く。い。入藤栗毛。追分。

あ「いぎやう」愛敬。名。きやうは異音。仏語に由来する。①いつくまやうなこと。「アイギヤウ。内に愛情をもて尊敬する。入日葡辞書。②顔かたち。が。わ。い。ら。しい。こと。——おく。れた。人の。顔を。見。て。は。入枕。木。の花。は。③性格。が。わ。い。ら。しい。こと。——顔。か。ち。を。か。し。て。入。津。保。樓。上。上。④情味。魅力。のある。こと。——か。や。う。に。なく。用意。なき。こと。を。憎。け。入源。東屋。——さう。愛敬相。名。仏語。柔和。で。慈。深。い。入菩薩。の。顔。のこと。——つく。愛敬つく。入力。四。人。顔。か。ち。が。わ。い。ら。しい。こと。——わ。い。ら。さ。がある。あいきやう。がある。ま。う。口。つき。いと。——き。入源。空蟬。心。

あ「いさ」愛敬。くは愛らしく、優美で、はなやか、かつ魅力に富む有様をいう。平安時代では主として女性について用いて。さ。う。か。わ。い。ら。しい。こと。——し。げ。は。の。め。かし。泣。いて。言。ふ。さ。へ。悲。し。う。か。わ。い。ら。しい。こと。——ひ。ら。く。入近松。職人鑑。

あ「いけう」愛染。「名。他サ変」けうは異音。好む、欲する意。①仏語。仏の教を信じ願ひ求めること。②愛好すること。「諸の道俗の為に——せらる。入靈異記。中の。心。人。に。——せ。ら。れ。ず。て。衆。に。は。恥。なり。入徒然。三。心。

あ「いさ」感。神楽の拍子のこと。はい。あ。い。さ。入神楽。大宮。あ「いさかり」愛盛り。名。いちばん。か。わ。い。い。こ。ろ。か。わ。い。い。さ。かり。入いそ。た。浮世風呂。二。上。

あ「いさつ」挨拶。名。自サ変。①縁。——、は。ら。り。ん。し。や。と。切。つ。て。ま。ひ。入近松。女腹切。②間がら。仲。二。郎。兵衛。殿。と。き。き。殿。見。れ。ば。う。ら。や。ま。し。う。な。ぬ。入近松。今宮。③応対。も。と。し。思。ひ。が。け。な。き。俄。ご。と。何。の。愛。想。も。な。い。事。で。は。——。あ。れ。は。入近松。扇八景。④仲裁。仲裁。人。の。事。で。は。——。に。て。讀。け。け。出。す。談。話。入相談。極まる。入近松。淀屋。——切。る。絶。交。する。離婚。する。——。と。取。り。か。は。せ。う。の。文。を。入近松。大綱島。——よ。し。仲。が。よい。い。つ。れ。も。入武道伝来記。

あ「いし」感。神楽歌の拍子のこと。はい。あ。い。そ。あ。い。そ。入来。や。ひ。ば。り。富。草。食。ひ。本。方。寄。り。末。方。入神楽。賤家の小昔。

あ「いしふ」愛執。名。煩悩。の。一つ。愛欲に心をうはわれること。愛着。——の。罪。を。晴。ら。し。聞。こ。え。給。ひ。て。入源。夢浮橋。

あ「いしやう」哀傷。名。自サ変。心に深く感ずること。悲。し。み。な。げ。く。こと。石田。の。王。の。至。り。し。時。に。山。前。の。王。の。し。て。作。れる。歌。一。首。入万。四。三。題詞。名。勅撰。和歌集。の。部。立。編。集。の。類。の。一つ。人。の。死。を。悲。し。む。歌。万葉集。の。挽。歌。に。當。たる。

あ「いす」愛す。他サ変。①愛する。いつくしむ。い。ま。し。六。条。殿。を。は。——し。申。さ。せ。給。り。け。り。入大鏡。昔物語。②大事にする。帝。の。君。の。う。つ。く。し。み。——し。給。ふ。き。あ。が。仏。を。入袈衣。衣。③手。心。を。加。える。適。当。に。あ。じ。う。何。程。の。事。を。か。し。い。た。ず。き。手。よし。暫し。せ。ふ。入平家。九。二度。之。懸。④あやす。女。は。子。を。——し。て。入アテ。三。リ。つ。い。う。とき。は。入胸算用。⑤愛情を行為に表し。ふ。き。あ。い。二。人。臥。して。し。つ。る。顔。よ。へ。今。昔。の。二。く。あ。い。ぜん。愛染。名。仏語。①愛染。明。王。の。略。それ。ま。で。は。一。様。へ。参。ら。う。と。ま。ま。な。付。も。入近松。水。朝。日。の。略。②愛染法。の。略。③さ。ま。の。御。修。法。五。壇。業。師。——、い。ろ。い。ろ。の。秘。法。だ。も。入増鏡。浦。千。鳥。——は。ふ。愛染。法。名。真。言。宗。で。健康。長。命。を。愛。染。明。王。に。祈。る。修。



くあいぜんみやうわう



法。『みやうわう』(愛染明王)。「名」真言密宗で愛欲の神。近世では、恋愛や遊女などの守護神として信仰される。これよりほかに身過ぎはなきことかと、一を恨みへ一代女也。

あいそ(愛想)「名」『あいさうの約』①社交的辞令。あいさよう。②「アイン・ニユウ」日葡辞書。②人に応対する態度。「この女房はあまり一がよくないやうさうまめか」。

「酒・遊子方言。③もてなし。時に何もおるすいへ膝栗毛大坂。④も小思ももき果ててのすいへ膝栗毛大坂。⑤この身は何たる大悪人。てたへ浄・桂川連理欄(わづらひ)」。⑥もき果てる。前項に同じ。「義経が」。き思し召されんるへ義経記。⑦つかし(愛想つかし)「名」人に対して愛情を断つこと。つれなく扱うこと。「一の腹し人しに愛情を断つこと。つれなく扱うこと」。

あいそ(感)神楽歌の拍子のこと。あいさ。『薦枕』(説)いや、高瀬の淀に、や、誰が数人(さぞ)へ神楽・薦枕。

あいたし「あ痛し」(連語)「浄瑠璃で多く用いる語。あ痛い。あいた。横腹をきく。何者やへ近松丹波与作」。

あいたちなし「形」(「愛立ち無し」の意か)愛想がない。つれない。「ほどりに影をならぶ若駒はいつかあやめに引き別るべき。一説に仮名づかいを「あいたちなし」して、「問」の立ち無しの意とする。当時、女性に障子、几帳など物越しに人に会うのが作法であった。それを、物を隔てて対面し、ことばを交わすことから、隔てている。うちとけている。転じて、無遠慮だ、無礼だ、の意を表すという。

あいたてなし「形」(「あいたちなし」の転か)①無分別である。「しとも狂気とも、笑はば笑へへ近松・職人鑑。②無作法である。「これは一い。玉を出させられたへ狂・庵の梅」。③盲目的である。「子を寵愛の一へ近松・鑑三」。④うてない。「さてもてなし。いことを書きき入れておかれたはへ狂・文荷」。

あいだたる「自ラ下」(「あいたちなし」)「愛垂るの意か」①甘える。「さすがにちとけぬまいと一れたりへ源・夕顔」。②なややかである。なまめかい。「かの君・柏木」は中略な

ほ若かになまめき、一れてそものし給ひへ源・柏木。あいたんところ「朝所」(「名」)「あしたころ」の転。太政官庁内、北東にある建物。参議以上の人が会食する所。こで、政務を執った。「あいたんところ」。

「あいたんところ」。「諸司八番。一時」のうにへ灰。ほろの地と名にけるへ平家・内裏炎上。

あいぢやく(愛着)「名」仏語。愛情に執着すること。「誠」の道、その根深く源は「へ徒然・心。フククアイヤクル」日葡辞書。①じひしん(愛着慈悲心)「名」愛着の心がとどつて起る慈悲の心。仏道にはいるための障害となるもの。「一は達多が互逆にすぐれ」。

「誦・熊坂」。②しゃうじ(愛着生死)「名」無常であるこの世を永久不變のものとして誤解してむやみに執着すること。「これひとへに」の業なれどもへ十訓抄・や。

あいつかはし「愛つかはし」。「形シク」あいきようがある。おもしろみがある。「御笛の音も一しく、涼しきやうにぞおはしけるへ今鏡・白河の花の宴」。

あいな「形容詞」あいなしの語幹「あいな」の形で連体修飾語を作る。「一のさかしやへアマリノ差シテ口々へ源・閑屋」。①の事へアマリノ事やと、笑ひ給ふものからへ源・行幸の。②だのみ(あいな頼み)「名」分りすぎた期待。説に、あてにならぬ頼み事と。「一の心おどりに、すべきやうなてへ更敷・宮仕へ」。

あいなし「形」①氣になく仕へ。感心しない。困ったこと。「まづこの世のことは一と思ふをへ蜻蛉・天禄二年」。②おもひろみがなく、興ざめがある。うはばかりとつる御よきは。③なむへ源・初音。「あまに興あらんとする事は、必ず一きものへ徒然・心。④不調和だ、無益だ。「老人ガ衆にまじはれたるも、一見苦しへ徒然・心。⑤連用形を副詞的に用いて「わけもなく、むしように」。「五節ノ舞姫ガ歩みならびつ出できたは、一胸づかれて、いどほしそあれへ紫式部・還俗以後」。

「古今仮名づかれは未詳。原義として「愛なし」オモシロクナシ」。「合ひなし」不調和の。の二が考えられる。あいのふ歩ぶ「自バ四」(「あゆぶ」の転)歩く。出かける。「ちつとわがうちへ一ひねえ。直・きこの横町だへ浮世風呂・西中」。

あいべつりく(愛別離苦)「名」仏語。「八苦の一つ。親兄弟、妻子など生別・死別する苦しみ。「一の悲しみを故郷の雪に重ねたりへ平家・三平大納言被流」。↑怨憎会(苦)」。②「あは呼びかける声」ああ、そうじゃない。ああ、連う。「ふんして供をせまいといふことか」。参りまするへ狂・富士松。

あいらし「愛らし」(「形シク」)かわいい。いとおい。「御目はほろほとして一しくおはするぞやへ沙石集」。

あいろ(文色)「名」『あいろの略』様子。物の区別。あやめ。「余り暗くて、物の一が見えぬへ狂・空院」。

あういへく(奥行く)「自カ下」(「奥の方へ行く」より遠へ行く)人目も知らず走らるるを。「かむこととすきまきへくへ枕・五月の御精進のほど」。

あうう(奥羽)「名」陸奥の国と出羽の国。今の東北。あうき(奥義)「名」おくき。極意。もつとも重要な事項。「義朝は武略の道には一を究めたる者なればへ保元・東評定」。①しよ(奥義書)「名」奥義を記した書。

あうしう(奥州)「名」昔の勿来の。白河の関以北の地。磐城の岩代。陸奥の陸奥。陸奥の五国。今の福島・宮城・岩手・青森の四県にあたる。①かいたう(奥州街道)「名」江戸時代「五街道の一つ。江戸から陸奥の三蔵の間に至る。宿駅約五十四」。

あうしゆくばい(鶯宿梅)「名」村上天皇の時、清涼殿の前の梅が枯れたので、これに代わるものとして、紀貫之の娘・紀内侍の家を求めたところ、内侍が、動なればいともかしこ意の宿の宿は問はばいかが答へむといふ歌を木の枝に結んであげたので、天皇は深く感ぜられたという故事。また、その梅。大鏡の昔物語拾遺集・十訓抄などに見える。

あうだ(便奥)「名」「あみた」の転。死人の首もなきが。①見かへし通る見れば盛衰記・南都騒動。あうなし「奥無し」。「形」(「奥がない」という意)深い考えなし。軽率である。「一くあはあははかぬ御心さまなればへ源・東屋」。

あうむ(鶯鷗)「名」①今の、オウを同じ。西城の霊鳥といわれた。「いとあはれなり。人の言をうむをまねぶへマネリ」むまへ枕鳥は。②鶯鷗の杯の略。曲水に

あかしんれい【関伽振鈴】〔名〕真言宗で行う朝夕の勤

行(行)。開伽の水を入れた杯の糸底で、受台のふちをた
たき、壇の上の鈴を振る。「高野の山に住む」「澄む三カゲ
ル心」の夕暮れの声(大木抄)

あかす「明かす」(他サ四)「^{あかす}」①夜が明ける意の自
動詞。明く(他動詞化で「暮らす」①の対)②夜をあかす。

「露しあれば」・「して行け」へ万・三六三。③ヨアカスへ日
葡辞書。④なになしなら夜を明かす。「暮はもうらさく
らし、夜はも思ふき」・しへ万・三六三。⑤「御格も参らばオ
ロサナイデなめ」・しへ万・三六三。⑥ある意の形容詞。明かしに対応する。「明くす」の意。⑦燈
火などを明るくする。燈火をともす。「漁る火は」・しへ万・三六三。⑧明らかにする。解明する。「三史五経の道
道きかたをあきらかに」とり・さむこそ愛敬(愛)なら
め(源・常木抄)。「フシヨアカスへ日葡辞書」⑨うち
あける。告白する。「さむありしなど」・しへ万・三六三。⑩なほ
くちもき心地して(源・手習)⑪生活する。「スギヤツツ
キヒモアサシカネ、クラシツツラフへ日葡辞書」

あかす「飽かす」(他サ下二)「^{あかす}」①飽きさせる。飽
きるほど与える。満足させる。「もち遊びオチヤ」に・せ
うぞ「^{あかす}」ひらがな盛衰記。②十分にまかせて事を行
う。「金に」・せし味なり「近松・丹波与作」

あかす「飽かず」(連語)「飽く」の未然形に打消の助動
詞「ず」が付いたもの①満足しない。ものたりない。「中納言
殿にまだ知れ奉り給はぬことぞ」・す思す(源・隆盛)②
あきない。いやにならない。「明け暮れ見奉る人だに」・す
思ひ聞(この御有様を(源・初音)③なり惜い。「若
き人々は」・す慕ひぬべくめで聞(ゆへ堤・逢坂越えぬ権中
納言)

あかす「あかす」(名)「あかんべい」の転。「すんならさあ、お泊
まり」・と述げるはすみに(入藤栗毛・三島)

あかす「赤」(名)「赤」武具・軍装の彩色をすべて
赤すること。また、その軍装の部隊。「飯富兵部といふ侍
大将の備へ」・なり(甲陽軍鑑・三)

あかす「赤」(名)「赤」水に浮いた赤い錆の。赤錆。ま
た、垢の意か。——の「みづ」赤さる水「(名)金
氣」の赤さる水に浮いてるもの。「人も忘れし」(猿蓑)

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。



あかす

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

あかす「赤」(名)「赤」赤い織地。——の錦 赤い織地の
錦。「もち葉に月の光を」へてこれや「なるなる」へ千
載・秋下。——の錦の直垂(赤地の錦で作った直垂。

「おのれこそ——の熟柿坊主」へ近松・女楠。②「顔を赤くめるから」芝居で、敵役（かたきやく）、悪形（あくがた）の異名。「あかつつら」とも。

あかときき「曉」(名)「あかつきに同じ」「秋の夜は」(寒く)
た近(三四五)。「くだち」(曉降ち)「名」夜がきてあけが
つき「曉月」(名)あけがたの月。「さ夜ふけて」
て「万(五六七)」。一つくよ「曉月夜」(名)月の残つてい
るあかき時分。時雨「降る」(八万(三六六))。一つ
ゆ「曉露」(名)あけがたおちる露。「このさの」に咲きに
むかふも「万(三五五)」。——やみ「曉闇」(名)「あかつきや
みに同じ」。「夕月夜」の朝影に「万(三六六)」
あかなくに「飽かなくに」(連語)。「に」は逆接の意と

あがなふ【**讀ふ・購ふ**】^{アガナフ}〔他八四〕^{〔他八四〕}→あがなふ
の未然形 十く〔準体助詞〕十に〔格助詞〕。
六六 飽か【**飽く**】の未然形 十な〔打消の助動詞「ず」の未然形〕
色々は〔新古今・夏〕。→ななく
⁴⁴ 清き河原を見れど「へ万二二」。「散りにし花の
なるか、置りたる場台には詩歌の意をも含みあてたりなり
にならぬ、満ちたるものをも。なごりが借しにの」。「吉野川
は」

「贖アカガ」へ和玉篇、「一宿ヲ」を伊養して罪を……
たてまつらむへ雨月・青頭巾」
六〇「商ふ」行ふ」などの語形に類推して、「あがふ」から
室町時代末ごろに派生した語形。

平家の旗。「平家、――を捧げて固め」(盛衰記・三・平氏清見閣下)

の顔」に「し」の時、の盛伏せりきへ記上、大國主神のあかはち(赤恥)。「名」(「明恥」の意で、恥を強めてかす語)明らかに恥。あかはち。「男畜生」人、でなし、かすのけうかシマツカへ近松・嶺山健児のあかはな(紅花・赤花)。「名」①染色の名。紅花はで染めた葉が、た薄い赤の絵の具の紅粉(「鼻」二指づから)の「さき」で、きかけて「葉末摘花」③「かさねの色目」の衣が赤、裏が青かきかへた。

あがひ(贖ひ)。「名」古くは「あかひ」つくない賠償。「青常」の君の「すべ」へ宇治治遣二四。↓あがふ。